

令和6年度 厚生労働行政推進調査事業費補助金  
(新興・再興感染症及び予防接種政策推進研究事業)  
分担研究報告書

HPV ワクチンなどのワクチン接種後に生じる種々の症状についての調査と  
その対応方法に関する研究

研究分担者 川口 善治

**研究要旨**

HPV ワクチンは、令和4年4月から、積極的勧奨の再開、及び、キャッチアップ接種が開始されたが、接種後に生じる多様な症状に対して、対応策や治療方法は確立されていない。そのため、今年度に富山大学附属病院を受診した患者について症状や治療内容などを明らかにすることとした。さらに、地域医療機関との連携や情報共有が重要と考え「HPV ワクチン接種後の副反応への対応」と題して行った講演会の効果についても検証することとした。

今年度のHPV ワクチン接種後に受診した患者は、前年度より増加しており、これは、キャッチアップ接種の影響と考えられる。しかし、全接種者数を考慮すると相対的には受診者数は少数であると言える。症例を検討した結果、全例において、接種後10日以内に症状が出現していた。このことから、接種後の経過観察が重要であることが再認識された。また、症状が3ヶ月以上継続している症例が多い一方で、内服薬治療で軽快している症例が多いことが認められた。これらの結果により、接種後に認められる多様な症状、経過および治療方法についての理解が深められたとともに、今後、子宮頸がん予防の機会が失われることのないよう、適切な情報提供と啓発活動の継続が重要であり、講演会の開催は有意義であることが認識された。

**A. 研究目的**

HPV ワクチンは、平成22年度から接種が開始されたが、接種後より多様な症状を呈する症例が報告され、平成26年6月以降、積極的勧奨が差し控えられてきた。その後、検討がなされ、令和4年4月から、積極的勧奨の再開、及び、接種の機会を逃した方に対するキャッチアップ接種が開始された経緯がある。しかし、HPV ワクチン接種後に生じる多様な症状に対して、対応策や治療方法は確立されていない。その為、ワクチン接種後の様々な症状を訴える患者に対する対応・治療法の分析を行い、これまでのマニュアルのブラッシュアップを図る必要がある。本研究では、HPV ワクチン接種後に症状を訴え、富山大学附属病院を受診した患者について、症状や治療内容などを明らかにすることとした。また、患者の多様な症状やその対応策に関して、地域医療機関との連携や情報共有が重要となるため、講演会を開催し、その効果を検証する

とともに、今後の対応に資することとした。

**B. 研究方法**

1. 患者の症状や治療方法について

令和6年4月1日から令和7年3月31日までに、HPV ワクチン接種後に症状を訴え、富山大学附属病院を受診した患者を対象とし、以下の問診内容を検討した。  
年齢、性別、診断名、ワクチンの接種回数、疼痛及び感覚（光・音・におい）の障害、運動障害、自律神経症状、認知機能障害、症状の持続期間、発症時期、ワクチン接種時に見られた症状（接種後の痛み、急性ストレス反応（動悸、過呼吸など）、血管迷走神経反射（失神など））他覚所見や検査で異常、心理社会的リスク、改善の有無（改善した場合、治療内容）等を検証した。

2. 講演会の効果について

令和7年2月6日、富山大学附属病院 痛みセンター 副センター長である高澤知規教授が

「HPV ワクチン接種後の副反応への対応」と題して講演会を行った。その講演会における効果を検討した。

(倫理面への配慮)

本研究については、愛知医科大学倫理委員会および研究班所属施設の倫理委員会を通して行っている。

## C. 研究結果

### 1. 患者の症状や治療方法について

前年度の HPV ワクチン接種後に症状を訴え受診された患者数が 2 名だったのに対し、今年度、受診された患者は合計 10 名で、その内患者から同意が得られた数は 7 件であった。また、前年度から継続して通院している患者を合わせると合計 8 名であった。年齢別として、初診時の年齢で、16 歳 1 名、17 歳 2 名、18 歳 1 名、19 歳 1 名、20 歳 1 名、22 歳 1 名、23 歳 1 名であった。症状発症の時期について、受診した 8 名全てがワクチン接種から 10 日以内の発症であった。発症時期と症状について、以下に示す。

- ・接種翌日より、頸部と背部、全身の痛み
- ・接種直後より、左上腕部痛
- ・接種から数日後より、全身倦怠感
- ・接種から 1 週間後より、発熱、腹部不快感、頭痛、頭がぼーとする、体(部位は様々)の痛みやしびれ、眩暈、目の見えにくい感じ
- ・接種 2 日後より、頭痛、嘔気、めまい、咳嗽、微熱、倦怠感
- ・接種直後より、気分不良と注射実施部位の左上腕部痛
- ・接種翌日より左上肢全体にしびれ、疼痛
- ・接種 10 日後より、浮動感・耳閉塞感

また、症状が 3 ヶ月以上継続していた患者は 5 名であった。さらに、ワクチン接種時に見られた症状として、接種後の痛みの症状があったのは 6 名、急性ストレス反応(動悸、過呼吸など)の症状があった患者は 0 名、血管迷走神経反射(失神など)の症状があった患者は 1 名であった。治療内容としては、鎮痛薬で軽快が 2 名、処方なし経過観察で軽快が

1 名、漢方薬治療で改善が 1 名、反応性リンパ節炎の診断で近医耳鼻科を紹介が 1 名、漢方薬と VitB1 2 補充療法を併用後、現在は漢方薬のみ継続中が 1 名、漢方薬継続中が 1 名、鉄剤補充療法を継続中が 1 名であった。

### 2. 講演会の効果について

講演会では、HPV ワクチン接種の経緯、患者増加の背景、キャッチアップ接種の概要、HPV ワクチン接種後に症状を訴え受診された患者数の推移や症例、予防接種ストレス関連反応(ISRR)、三角筋への筋肉注射の際に生じる可能性のある合併症などについて述べられた。また、副反応に対するバックアップ体制について地域において確立されていることが強調して伝えられた。講演後は、活発な質疑応答がなされ、参加者からは HPV ワクチン接種後の副反応とその対応方法について、詳細な知識が得られたとのコメントを得られた。

## D. 考察

### 1. 患者の症状や治療方法について

今年度の HPV ワクチン接種後に多様な症状を呈して受診した患者は、前年度に比較して増加していた。これは、キャッチアップ接種にともなう HPV ワクチン接種者の増加が関連していると考えられる。しかし、今年度のキャッチアップ接種を含めた全 HPV ワクチン接種者数を考慮すると、8 名の受診者数は相対的には少数であると考えられる。

発症の発症時期について、全ての症例において、接種後 10 日以内に症状が出現していたことから、今後も接種後の経過観察が重要となるのが今回の調査で再認識された。

また、症状の継続日数について、8 名中 5 名は、症状が 3 ヶ月以上継続しており、このことは慢性化の可能性も含んでいる。一方で、治療内容としては、内服薬治療で軽快している症例が多く、重篤な処置などを要する症例は認められていない。

### 2. 講演会の効果について

講演会後の参加者のコメントから、HPV ワクチン接種後の症状や対応に関する知識の向上が図られた。また、副反応に対するバックアップ体制が確立されている認識が強化され

た。今後も、キャッチアップ接種が延長されたことから、患者数は減少しない可能性はあるが、副反応への過度な懸念により、子宮頸がん予防の機会が失われることのないよう、適切な情報提供と啓発活動の継続が重要であると考えられた。

#### E. 結論

本年度における HPV ワクチン接種後の症状および治療内容の再検討を通じて、接種後に認められる多様な症状、経過および治療方法についての理解が深まった。子宮頸がん予防の機会が失われることのないよう、適切な情報提供と啓発活動の継続が重要であり、講演会の開催は有意義であると言える。

#### F. 健康危険情報

特になし。

#### G. 研究発表

##### 1. 講演会

1) 高澤知規. HPV ワクチン接種後の副反応への対応. 慢性疼痛診療講演会 ; 2025 Feb. 6 ; 富山.

##### 2. 学会発表

1) 川口善治. 痛み診療から不眠を考える. 外科医のための不眠症診療セミナー ; 2024 Mar 1 ; 高松.

#### H. 知的財産権の出願・登録状況（予定を含む。）

1. 特許取得

なし

2. 実用新案登録

なし

3. その他

なし

4. 研究協力者

高澤 知規 富山大学学術研究部医学系  
麻酔科・麻酔科学